

沖縄生まれの戦隊ヒーローの 話しことばにみる性差

ー人気テレビ番組「琉神マブヤー」の文字化資料の分析よりー

高橋 美奈子

1. はじめに

沖縄生まれの戦隊ヒーロー番組「琉神マブヤー」が、ここ数年沖縄県内外で人気を博している。「琉神マブヤー」は、女の子向けのご当地キティのような土産物が男の子向けにはあまりないということで、秋田で人気のローカルヒーロー「超神ネイガー」のスタッフも参画し企画された。マブヤーは、「魂」を意味する「マブイ」からネーミングされたキャラクターである。「琉神マブヤー」は、琉球放送で2008年10月4日から同年12月27日まで、毎週土曜日午前6時45分から7時の15分間番組として、13回にわたって放送され、2009年8月には全編を収録したDVDも市販された。ストーリーは、9つのマブイストーン（古くから伝わる9頭の龍が姿を変えた石のことで、それぞれは「ウチナーグチ」「石敢當^{いしがんとう}」「テーゲー」「エイサー」「イチャリバチャデー」など沖縄の人々が大切にしている9つの伝統文化の意）を狙う悪の軍団マジムン（魔物）と正義のヒーロー琉神マブヤーが沖縄の平和をかけて戦う物語である。沖縄タイムス⁽¹⁾によると、早朝の放送にもかかわらず平均視聴率は5%、最大瞬間視聴率は9%と、全国区の戦隊ヒーロー番組をしのぐ数字を叩き出したという。この番組についてプロデューサーである古谷野裕氏は「出演者は全て沖縄人で、制作スタッフもほぼ沖縄人でやっていますので、沖縄独特の色が出ている」⁽²⁾という。それゆえ、番組は正義と悪の戦闘シーンにとどまらず、沖縄の方言や文化がふんだんに取り入れられており、「琉神マブヤー」の公式ウェブサイト⁽³⁾には番組内で頻繁に用いられるウチナーグチの用語解説コーナーが開設されているほどである。この点について前述

した古谷野氏は、この番組を通して分からない方言を祖父母や両親に聞くなどして家族間で沖縄の方言や文化を語り合う場が作れば理想だと語っている⁽⁴⁾。

従来、このような子ども向けのテレビやアニメは、文化的ステレオタイプの役割語が満載である（金水 2003）と言われている。佐竹（2003）は、こうしたテレビアニメによる役割語が、女・男はどう話すべきかという規範意識を形成し、二つの性別カテゴリーが非対称的に意味づけられていることを知識として与える側面があると指摘する。さらに、そうした「女ことば／男ことば」は標準語による話しことばが中心となるため、標準語を正しい日本語とする評価基準を与え、地域の子どもたちも標準語の性差形式を含む語法を身につけている可能性を示唆している。一方で、日高（2009）は秋田で人気のローカルヒーロー「超神ネイガー」が地元の伝統行事や方言をキャラクター化していることにより、「地域アイデンティティ」の形成促進につながっていると述べている。沖縄で人気の「琉神マブヤー」は標準語による性差規範を拡散しているのか、あるいは「地域アイデンティティ」の形成を促進させているのか。本稿では、地域語主流社会の一つである沖縄県の戦隊ヒーロー番組「琉神マブヤー」において、どのような言語形式が女性的・男性的指標形式として使われているのかを分析し、方言社会における性差規範拡散の有無について考察する。

調査対象とする「琉神マブヤー」の主な登場人物⁽⁵⁾は以下のとおりである。なお、悪の軍団マジムンのキャラクター名は、沖縄に生息するマイナス性向の生物に由来してネーミングされている。

琉神マブヤー：ニライカナイ（理想郷）からやってきた魂の戦士でマブイストーン（マブイの魂）の守り神。

叶^{かなひ}：ヤチムン（陶芸）見習い中の22歳の青年。赤ん坊の頃に今の師匠である若次郎^{わかしろう}に拾われ、娘の紅亜^{くれあ}と共に育てられる。マブイグミ（魂込め）により琉神マブヤーの魂を宿し、人格は叶のまま琉神マブヤーに変身できるようになる。自分がマブヤーであることに少し戸惑っている。

ふくちがんじろう　くれあ
福地岩次郎：紅垂の父親であり、叶の育ての親でもある。日常は工房で陶芸に
いそしみ叶に陶芸を教えている師匠。

ふくちくれあ
福地紅垂（以下、クレア）：岩次郎の娘。その美貌から村の青年達に人気があり、
叶も思いを寄せている。

よなばるけん
与那原犬（以下、ケン）：福地工房へ迷い込んできた犬。普通の人間には犬にしか
見えないが、叶には怪しいおじさんにしか見えない。正体はシーサー（獅子の形をした
沖縄の代表的な魔よけ）であり、叶に助言を与える。

うふかねぐすくにらい
大金城新雷（以下、ニライ）：青年実業家。生き別れた弟を探しているときに叶達に
遭遇する。赤ん坊のときに叶とともに捨てられて、ハブデービルに拾われた。その後、
ハブデービルに師事し、オニヒトデービルとなる。

やましろ
オバア：村の若者達を暖かく見守る山城ストアの女店主。ビーチでマブイ（魂）を落とした
叶にマブイグミ（魂込め）をする。登場人物の中では最も高齢者。

悪の軍団マジムン（魔物）

ハブデービル：悪の軍団マジムンの親方で、口癖は「ハゴー（汚い）」である。
ハブをモチーフとした姿をしている。

オニヒトデービル：悪の軍団マジムンのナンバー2である。幼い頃にハブデービルに
拾われて悪の軍団マジムンの仲間になる。叶の兄、ニライ。オニヒトデをモチーフとした
姿をしている。

マングーチュ：悪の軍団マジムンの紅一点である。もともとは邪悪な存在ではない、
遅刻常習犯。マングースをモチーフとしており、全身はピンク色でバストが強調された
コスチュームを身につけている。

クーバー（くも）1号・クーバー2号：悪の軍団マジムンの戦闘員である。「ハゴー（汚い）」
が口癖。クモをモチーフとした、全身黒づくめの姿である。

2. 調査概要

本調査は、「琉神マブヤー」全13話の台本をもとに、市販されている「琉神マブヤー」の
DVD（各話15分の全13話収録）で話されている発話と照ら

し合わせながら文字化資料を作成し、データとして使用する。文字化に際しては、自然談話の定量的調査に適するように考案された宇佐美（2007）による「文字化の原則」に従い、一発話文は原則的に話者交代あるいは間がある箇所とする。ただし、個人の特定が難しい複数同時発話文や笑い声・叫び声・うめき声・鳴き声・指笛などのパラ言語的要素は文字化の対象外とする。このように文字化した資料をエクセルに入力し、男女差が顕著であると言われる文法的な主な特徴について分析する。

分析項目については、益岡・田窪（1992）の「ことばの男女差」、鈴木（1993）の「女性が使えない語形式」、金水（2003）の「言葉の性差」、佐竹（2003）の「性差の目立った形式」、小林（2009）の「女性・中性・男性文末形式の再分類」を参考に、性差が顕著だとされる言語形式や発話行為－自称詞、対称詞、感動詞、終助詞（疑問以外）、断定・主張の表現、推量・確認の表現、解答要求の表現、行為要求の表現－をとりあげ、本データの発話文の中でどのような言語項目が女性的指標形式・男性的指標形式・中立的指標形式として用いられているのかを考察する。なお、各分析項目の方言形⁽⁶⁾については大城・尚（2007）と高江洲（1994）をもとに語形を抽出する。

3. 調査結果

3.1 発話文数

上述した方法で得られた全発話文数は1806文であった。全ての登場人物の発話文数と登場人物数は表1の通りである。

表1 全発話文数と登場人物数

	女の登場人物	男の登場人物	性別不詳人物 ⁽⁷⁾	総数
発話文数	279文（15%）	1526文（85%）	1文（1%）	1806文（100%）
登場人物数	10人（22%）	34人（78%）	1人（2%）	45人（100%）

表1を見ると、男の登場人物の発話文数が8割を超え、登場人物数も男性が大半を占める。さらに、女の登場人物については男の登場人物と比較する

と、登場人物数の割合より発話文数の割合の方が小さい。斎藤（1998）によると、「変身ヒーローもの」は「男の子の国」特有の番組で、登場人物も男性に偏る傾向があり、さらに紅一点として登場する女性は男たちにちやほやされる20歳前後のセクシーな若い美少女であるという。「琉神マブヤー」もその例にもれず、男性中心の物語であり、また、正義の味方側のクレア、悪の軍団のマングーチ、いずれも紅一点のセクシーな若い美少女である。

なお、主人公の叶はマブヤーと同人格であるが、叶がマブヤーであることを知っている人物はケンとニライ、森の主の3人だけなので、本稿の分析では別々の登場人物として扱う。また、ニライとオニヒトデービルの扱い方も同様である。

3.2 自称詞

自称詞について、全登場人物の結果は以下の表2のとおりである。

表2 全登場人物による自称詞の出現状況〔（ ）内は出現度数〕

	女の登場人物	男の登場人物
自称詞	わたし(5)、 オバア(3)、 あたくし(1)	おれ(63)、ワッター(8)、ワン(7)、 ぼく(2)、わたし(2)、名前(2)、ワー(1)、 うちら(1)、わたくし(1)、おれら(1)
使用人数	3人	15人

表2を見ると、女性発話者のみに見られる自称詞に「オバア」と「あたくし」がある。一方、男性発話者のみに見られる自称詞は「おれ」、「おれら」、「ぼく」、方言形の自称代名詞、名前、「うちら」⁶⁾がある。

まず、女性発話者のみに見られた「あたくし」であるが、これはオバアによる使用である。第1話でオバアが経営する「山城ストア」の店先で、オバアとお客の男性が何気ない話をしていると、突如、マジムン軍団に「ウチナーグチ」（沖縄語）のマブイストーンが奪われ、その影響で人々がウチナーグチを話せなくなってしまう。オバアの「あたくし」使用は、この「ウチナ

ーグチ」のマブイストーンが奪われた直後の談話で現れる（談話1）。

談話1 「ウチナーグチ」のマブイストーンを奪われた後の場面

- | |
|--|
| 1 男性：ハイサイ（こんにちは）、オバア。チャーガンジュー（元気）
ネ？ ⁽⁹⁾ |
| 2 オバア：は一もう、オバアはチャーガン・・・ |
| 3 オバア：ええ、 <u>あたくし</u> 、元気ですよ。暇なときには、フィット
ネスクラブで汗をかいてますから。 |
| 4 男性：あー、そうですかー。それは何よりです。
(通りかかった宮城君を見て) おー、宮城君。どこにいくんだい？ |
| 5 宮城君：ちょっと野暮用でさ。 |
| 6 男性：たっしやで。今日も入道雲がでかいやー。 |
| 7 オバア：ほんと、よいお天気だこと。(笑い) |

ライン2で、オバアは「チャーガンジュー」（元気だ）と言おうとしたがマブイストーンが奪われた影響でウチナーグチが話せなくなり、ライン3以降は標準語になる。オバアはライン3で、自称詞「あたくし」、終助詞「のよ」を使い、さらに、ライン7では、感動文の「～こと」という文末表現を使っている。「～こと」は金水（2003）によると、普通の「女性語」からはみ出た「お嬢様ことば」の指標であり、このような特徴的な女性専用表現は「標準語」の位置から滑り落ちた役割語度の強い表現であるという。オバアが使用した自称詞「あたくし」も現在一般的に使用されている標準語とは言えず、「お嬢様ことば」と言えるだろう。つまり、標準語しか話せなくなったときに使われていることばが、現在の標準語では使われていない非現実的なお嬢様ことばであるということは、地域語話者にとって標準語における女性専用表現はある種、非現実的な表現であることを含意していると言える。

さらに、男性の方も、標準語になったライン4では、疑問の終助詞に「だい？」を用いている。詳細は後述の「終助詞」で述べるが、「だい？」は一般的に男性指標形式と言われる言語形式である。

その後、「ウチナーグチ」のマブイストーンを奪い返し、第1話の終盤で、上記の談話1と同じようなやりとりが繰り返される。その場面の談話2を見ると、談話1で明確だったオバアと男性の性差表現は全く見られない。談話2では、どちらも「ネ？」あるいは「サ」という方言形式の終助詞を用いている。また、オバアの自称詞も「あたくし」から「オバア」という性的指標性が明確ではない方言形の親族呼称に変わっている。

談話2 「ウチナーグチ」のマブイストーンを取り戻した後の場面

- | | |
|---|--|
| 1 | 男性：ハイサイ（こんにちは）、オバア。チャーガンジュー（元気）ネ？ |
| 2 | オバア：ハーッサ（はーもう）、 <u>オバア</u> はいつでもチャーガンジュー（元気）サ。 |
| 3 | 男性：あいっ、ジョートー（それは良い）サー。今日もティーダ（太陽）クワンクワン（ガラガラ）して、いい天気だねー。 |
| 4 | オバア：デーヂビライ（とても素晴らしい）。 |

次に、男性発話者のみに見られた「おれ」と「ぼく」について観察する。「ぼく」の使用は、「ぼくはここにいる」（叶）、「ぼく喉かわきました」（ケン）の2例だけである。最初の叶の発話は、クレアの心の中の叶の声であり、現実場面での対話とは異なる。また、ケンによる「ぼく」使用も丁寧体との併用である。一方、「おれ」は3例（うち2例は叶による「～っす」という「です」の省略形）を除いて全て普通体との併用である。男性発話者には「おれ」が無標の常用形として用いられていることが分かる。

「おれ」と「ぼく」同様に、方言形自称詞「ワン」（わたし）、「ワー」（わたし）⁽¹⁰⁾、「ワッター」（「ワン」の複数形でわたしたちの意）も男性発話者のみに見られた語形である。ただし、使用者はハブデービルと岩次郎、通行人の男性の3人のみに限られた。ハブデービルと岩次郎は比較的年配の男性であり自称詞以外にも方言をよく用いている。また、通行人は、年齢は若い、自称詞以外にも方言使用が著しい男性である〔例：「ワッターオジー（おじ

いちゃん)、シニ(とても) テーゲー(適当) ヤンバーヨー(なんだ)」。方言形の自称代名詞は方言使用の著しい男性話者特有の指標形式と言える。

そのほかに男性発話者のみに見られた自称詞として「名前」と「わたくし」がある。全て主人公叶による使用で、「叶テンションあがりましたー」と「わたくし、叶はただいま海に到着いたしましたー」の2発話に見られた。いずれも第三者に対しての宣言的発話であり、丁寧体や謙譲語との併用であることから、非日常的な状況での使用である。

女性発話者と男性発話者ともに見られた自称詞として「わたし」がある。しかし、女性発話者が無標の常用形として使用していた一方で〔例：「じゃあ、わたしはこれで」(マンガーチュ)、「わたし、やっぱり直接行ってくる」(クレア)〕、男性発話者による「わたし」使用は全て丁寧体との併用であった〔例：「わたしは犬じゃなくてシーサーです」(ケン)、「わたし大金城新雷と申します」(ニライ)〕。

つまり、自称詞については、「わたし」は女性的指標形式の自称詞として、「おれ」、「ぼく」、方言形式の自称代名詞は男性的指標形式として用いられており、発話者の性差による違いが明確であった。また、自称詞語形のバリエーションで言えば、女性発話者は「わたし」か親族呼称のみで男性発話者に比べると選択肢が非常に少ない。これは高橋(2009)で指摘したように地域語社会で暮らす女性特有の自称詞の選びづらさ⁽¹¹⁾に起因していると言えよう。

3.3 対称詞

次に、主な登場人物がそれぞれをどう呼んでいるかについて表3に示す。対称代名詞は太字で示した。

まず、使用者数と出現度数が最も多い「おまえ」であるが、男性発話者は叶を除いて全て使用している。ただし、叶が使用していないとは言え、同人格のマブヤーに変身すると、ハブデービルに対して用いている。一般的に対称代名詞は主に目下に対してか蔑視語として用いられることを考えると、使用が制限される。

表3 主な登場人物による対称詞の出現状況〔()内は出現度数〕

【呼ぶ人】

【呼ばれる人】

	叶	マブヤー	ケン	ハプデール	クレア	オバア	岩次郎
叶			おまえ (29)、 名 (14)、 きみ (2)、 あんた (1)		名 (13)、 あんた (2) きみ (1)、 軟弱青年 (1)	名 (4)、 あんた (3) おまえ (1)	おまえ (4) 名 (3)
マブヤー			名 (9)、 おまえ (1)	名 (18) おまえ (3) あんた (1) ヤー (4)、 イッター (2)			
ケン	名 (18)、お じさん (2)、 ワタプー (太 ちゅ) (1)	名 (3)		犬 (2) おまえ (1)	名 (4)		名 (2)
ハプデール	マジムン (1)	名 (3)、 マジムン (1)、 おまえた ち (2)、 おまえ (2)	名 (3)、 あんた (1) ヤー (1)		あんたた ち (1)	あんた (1)	
クレア	名 (17)、 名+ちゃん (1)	名 (2)	名 (11)、 名+ちゃん (1)	おじょう さん (1)		名+ちゃ ん (1)	名 (2)、 おまえ (1)
オバア	オバア (6)			オバア (1)			
岩次郎	師匠 (2)		名 (2)		お父さん (2)		

叶が「おまえ」を使用できる相手として、悪のマジムン軍団かクレアが考えられるが、マジムンに遭遇すると、叶はマブヤーに変身するので、叶の人格のときには、マジムンとの対話が非常に少ない。また、クレアに対しては、クレアが師匠の娘であり、思いを寄せている相手であるため、使用が見られなかったと推測される。一方、女性発話者では「おまえ」の使用は全女性発

話者の中でもオバアのみである。オバアによる使用は、目下である叶に対しての1例〔「おまえはもう、ヨーガリガリー（よわよわしく）して、もうヨーガラ（ひ弱）」〕と自分の年下の彼氏に対しての使用である〔例：「フラー（あほ）か、おまえは」〕。こうしてみると、女性発話者は使用が限られているのに対し、男性発話者は幅広く使用していることから、「おまえ」は男性的指標形式として用いられていると言える。

次に、「きみ」と「あんた⁽¹²⁾」についてであるが、表3を見ると、女性、男性ともに使用が観察される。「きみ」を使用しているのはクレアとケンである。ふたりは叶に対して「きみ」と「あんた」の両方を用いている〔例：「なんであんたが照れてるの？」（クレア）、「あんたのためを思って言ってるんでしょ？」（ケン）、「聞こえたよ、きみの声」（クレア）、「きみはチューをしたことはあるかな？」（ケン）〕。

方言形式の対称詞は、表3では「ヤー」と「イッター」が見られるが、他の登場人物には「ヤッター」の使用もある。「ヤー」は単数の「おまえ」を意味する琉球方言で、「イッター」と「ヤッター」は複数の「おまえたち」を意味する。「イッター」が古くからの琉球方言であるのに対し、「ヤッター」は琉球方言と標準語の中間言語として生まれたウチナーヤマトグチで、「ヤー」と「イッター」の混用語である。これらの方言形式の対称詞は、1例以外は先に見た自称詞同様に、男性発話者に使用が観察された。女性の使用する1例は、ツアーガイドの女性が観光客に向かって発話した「ヤッターいちゃいちゃサンケー」（おまえたちいちゃいちゃするな）で、方言形対称詞「ヤッター」が使われていた。これは、観光客に対して敬語で丁寧に案内をしていたツアーガイドが、マジムン軍団に「イチャリパチョーデー」（一度会えばみな兄弟）のマブイストーンを奪われたことによって態度が豹変した場面での使用であり、特殊な状況によるものである。

つまり、対称詞については、「あんた」と「きみ」は中立的指標形式であるが、「おまえ」と方言形式の対称代名詞は男性的指標形式と言える。

3.4 感動詞

続いて、感動詞では標準語の「おい」と「こら」、「あら」、「まあ」に加え、方言形式の「アイ」（あっ！、おお！）、「ウリ」（ほら！）、「アガ」（痛っ！）、「トー」（よし！、さあ！）、「アハ」（ああ！）、「エー」（おいつ！、もう！）、「ダー」（ねえ！）、「ハッサ」（もう！）⁽¹³⁾の出現頻度を調べた。表4には全発話文の中で標準語による感動詞の使用が見られた人物全てに加え、叶とクレアについても使用状況を示した。

表4 感動詞の出現状況〔（ ）内は出現度数〕

	性別	あら	まあ	おい	こら	方言形 アイ・ウリ・アガ・トー・アハ・エー・ダー
叶 (379発話)	男	0	0	0	0	アガ (6)、エー (3)、ダー (1)
ケン (294発話)	男	0	0	10	1	アイ (1)、ウリ (2)、アハ (1)、エー (8)
ハブデービル (273発話)	男	0	0	4	0	アイ (2)、トー (1)、エー (6)、ダー (1)、ハッサ (2)
クレア (140発話)	女	0	0	0	0	ダー (1)
マブヤー (83発話)	男	0	0	1	0	エー (1)
オバア (80発話)	女	1	0	0	0	アイ (9)、アガ (2)、トー (2)、エー (3)、ダー (1)、ハッサ (1)
岩次郎 (57発話)	男	0	0	2	0	エー (1)

表4を見ると、「あら」については、オバアによる1例のみであった（「あら、かわいそうにね」）。

「おい」はケン、ハブデービル、マブヤー、岩次郎に、「こら」はケンに使用が観察された〔例：「おい、おれケンだよ」（ケン）、「おい、処刑場に運んで始末しろ」（ハブデービル）、「はは、おれの口からキスって言葉なんて言わすな、こら」（ケン）〕。このように「おい」と「こら」については、自称詞「おれ」や命令形、禁止の終助詞「な」など、他の男性的指標形式とともに用いられる傾向がある。また、男性であればだれでも用いるというよりは、部下や弟子などの目下の相手に対してのみ用いられる表現である。

方言形式については、全男性登場人物34人中16人がいずれかの感動詞を用いている一方、女性の場合は全女性10人の中で使用しているのはオバアとクレアの2人のみである。しかも、クレアは叶に対する1発話「ダー、どこによ、どこ」での使用に限られる。

つまり、感動詞については、「あら」が女性的指標形式、「おい」と「こら」は男性的指標形式、方言形式も詳細な語形による分析が必要であるが、基本的には男性的指標形式である可能性が高いと言える。

3.5 終助詞

終助詞では、「わ」系終助詞（わ、わよ、わね、わよね）、「ぞ」、「ぜ」、「な」（禁止形の「な」以外の用法）、方言形式の「サー」（よ）を調べたところ、結果は以下の表5の通りであった。なお、表5には該当形式を使用した登場人物について全て示す。

表5 終助詞の出現度数

	性別	わ系	ぞ	ぜ	な	方言形	サー
叶（379発話）	男	0	0	0	5	7	
ケン（294発話）	男	0	3	1	23	13	
ハブデービル（273発話）	男	0	10	15	19	8	
クレア（140発話）	女	0	0	0	1	7	
オバア（80発話）	女	1	0	0	0	7	
岩次郎（57発話）	男	0	1	0	3	1	
ニライ（37発話）	男	0	0	1	2	5	
オニヒトデービル （32発話）	男	0	5	0	1	0	
マングーチュ（17発話）	女	1	0	0	0	1	
その他1人（あいちゃん）	女	0	0	0	0	1	
その他12人（団長、彼氏 他）	男	0	0	3	8	11	

まず、「わ」系終助詞については、オバアの「やがて結婚するわーよ」とマングーチュの「持ってきたわよ」の2例だけであり、女性発話者に使用が限られていた。ただし、オバアの「わーよ」については、方言的アクセント

であり、標準語による女性的指標形式として用いられているとは言い難い。

一方、「ぞ」と「ぜ」は、男性発話者のみに使用が限られていた〔例：「ケン、うるさいぞ」(岩次郎)、「先行くぜ、ハニー」(オバアの彼氏)〕。

終助詞「な」は、クレアの1例(「見たかったな一、花火」)を除き、全て男性発話者によるものであった。ただし、このクレアによる「な」使用は、佐竹(2003)のテレビアニメにおける女性発話者による「な」使用の結果同様、聞き手目当てではなく、独り言の「な」である。一方、男性発話者の「な」使用は、聞き手目当て用法が29例〔例：「ケン、一緒に協力しあって戦おうな」(叶)〕、独り言用法が33例〔例：「あれ、見たことあるな」(ハブデービル)〕であった。

方言形「サー」は男女にかかわらず使用が観察される〔例：「食べれんサ」(マンガーチュ)、「テーゲー(適当) サ、テーゲー(適当)」(岩次郎)〕。

まとめると、終助詞については、出現度数は少ないものの「わ」系終助詞は女性的指標形式、「ぞ」、「ぜ」、「な」は男性的指標形式、方言形「サー」は中立的指標形式として用いられていると言える。

3.6 断定・主張の表現

断定・主張の表現として、「のよ」、「の」(問いかけではなく主張の用法)、「だ」の言い切りの形(「んだ」を含む)、「だよ」、「だね」、「だよね」、「だな」、「だぜ」、「だよな」、方言形の「(ダ) ワケ」(の(だ))、「ダヤ」(だね)、「(ダ) バ(ヨ)」(だよ)、「ドー」(だよ)、「ヤッサ」(じゃん、だ)、「ヤッシ」(じゃん)についての使用状況を以下の表6に示す。

表6を見ると、「のよ」の使用は女性発話者に限定されている〔例：「なんでわからないのよ」(クレア)、「ええ、あたくし、元気ですのよ」(オバア)〕。しかし、オバアの使用は前述したように標準語しか話せなくなったことによるので、実質、クレアのみ使用に限られる。

一方、「だな」「だぜ」「だよな」の使用は男性発話者に限られる〔例：「おまえも相当テーゲー(適当) だな」(岩次郎)、「ユイマール(相互扶助)も崩壊だぜ」(ハブデービル)〕。

また、「の」〔例：「おうちの前に倒れてたの」(クレア)、「おれはちゃんと作ってるの」(叶)〕、「だ」〔例：「でも、聞こえたんだ」(クレア)、「おれ変身したんだ」(叶)〕、「だよ」「だね」「だよね」〔例：「あたりまえだよ」(クレア)、「最悪だよね」(ハブデービル)〕は比較的発話者の性差に関係なく用いられていた。

表6 断定・主張表現の出現状況〔()内は出現度数〕

	性別	の よ	の	だ	だよ・ だね・ だよね	だな・ だぜ・ だよな	方言形 (ダ) ワケ・ダヤ (ダ) バ(ヨ)・ドー ヤッサ・ヤッシ
叶 (379発話)	男	0	3	8	7	1	ワケ(4)、ダヤ(1)、 バ(2)、ヤッシ(1)
ケン (294発話)	男	0	1	17	16	2	ワケ(8)、ドー(2)
ハブデービル (273発話)	男	0	0	6	4	8	ワケ(8)、 ヤッサ(5)、バ(9)、 ヤッシ(1)
クレア (140発話)	女	3	2	4	3	0	ワケ(4)
オバア (80発話)	女	1	0	0	3	0	ドー(1)
岩次郎 (57発話)	男	0	0	1	3	2	ドー(2)
ニライ (37発話)	男	0	0	2	0	0	ワケ(1)、ヤッサ(2)
オニヒトデービル (32発話)	男	0	0	5	0	0	0
マンガーチュ (17発話)	女	0	1	0	0	0	0

また、方言形については、断定・主張を表す語形が多く、各語形の断定の強さの度合いも異なり、使用語形の偏りもあるので詳細な分析が必要であるが、女性発話者による使用が、クレアによる「ワケ」とオバアによる「ドー」だけであることから、男性的指標形式の語形が多いと言える〔例：「今度の取引先の人、とってもテェーゲー(適当) ダワケ」(クレア)、「犬に身を隠したシーサーダワケよ」(ケン)、「犬のくせに物知りダヤー」(叶)、「ウチナーンチュはテェーゲー(適当) でいいバーヨ」(叶)、「ワンニン(わたしは) テェーゲー(適当) ドー」(岩次郎)、「は一、エイサー忘れてしまったヤッサ

二」(団長)]。

つまり、断定・主張の表現では、「のよ」は女性的指標形式、「だな」「だぜ」「だよな」は男性的指標形式であることがわかった。さらに、方言形については、多くの語形が男性的指標形式である可能性を示していた。

3.7 推量・確認の表現

推量・確認の表現では、「でしょ(う)」と「だろ(う)」、方言形式の推量「ハズ」(だろう)の出現状況を調べた。以下の表7には全発話文の中で該当形式の使用が見られた人物についての出現度数を示した。

表7 推量・確認表現の出現度数

	性別	でしょ (う)	だろ (う)	方言形 ハズ
叶 (379発話)	男	6	17	0
ケン (294発話)	男	2	6	0
ハブデービル (273発話)	男	3	11	1
クレア (140発話)	女	3	0	0
オバア (80発話)	女	2	0	0
岩次郎 (57発話)	男	1	0	0
ニライ (37発話)	男	0	3	0
オニヒトデービル (32発話)	男	0	1	0
その他1名(街の人)	女	1	0	0
その他6名(団長、メタボ等)	男	3	9	0

表7を見ると、「でしょ(う)」は発話者の性差に関係なく使用されているが、「だろ(う)」は男性発話者による使用に限られる。男性発話者による「だろう」は、相手への確認用法〔例:「どうみてもおじさんだろ?」(叶)、「あー、おまえよ、さっき変身しただろ?」(ケン)]が主で、推量用法はハブデービルの1例(「ふ、いいだろ」)だけであった。また、方言形推量の「ハズ」はハブデービルによる1例のみの使用であった[「でも毎月一日ウートートー(祈祷)しなくていいから、沖縄の人たちも喜ぶハズよー」。つまり、推

量・確認の表現については、「でしょう」が中立的指標形式である一方、「だろう」は男性的指標形式であると言える。しかし、方言形「ハズ」については、出現例が1例しかないので、表7からだけでは判断ができない。

3.8 解答要求の表現

解答要求の表現は、「の？」と「かしら」、「か?」、「かい?」、「だい?」、方言形「(ダ) バ?」(若い世代の疑問)、「ネ?」(疑問)、「ワケ?」(の?)について調べた。該当形式を使用した全登場人物による使用状況は以下の表8の通りである。

表8 解答要求表現の出現状況 [() 内は出現度数]

	性別	の ?	かし ら	か ?	かい ?	だい ?	方言形 (ダ) バ?、ネ?、ワケ?
叶 (379発話)	男	13	0	3	0	0	バ? (7)、ワケ? (2)
ケン (294発話)	男	9	0	17	0	0	バ? (3)
ハブデービル (273発話)	男	7	0	20	0	0	バ? (5) ネ? (4)
クレア (140発話)	女	12	0	3	0	0	ワケ? (1)、ネ? (1)
マブヤー (83発話)	男	0	0	2	0	0	バ? (1)
オバア (80発話)	女	1	0	4	0	0	バ? (1)、ネ? (4)
岩次郎 (57発話)	男	0	0	4	0	0	ワケ? (1)
ニライ (37発話)	男	0	0	1	0	0	0
オニヒトデービル (32発話)	男	0	0	1	0	0	0
マンガーチュ (17発話)	女	0	0	0	0	0	ワケ? (1)
男性 (20発話)	男	0	0	0	0	1	バ? (1)、ネ? (1)
その他1人 (通行人)	女	1	0	0	0	0	0
その他9人 (団長、メタボ、デ モ隊、彼氏他)	男	3	0	8	0	0	バ? (8)、ネ? (2)

なお、本調査では対話者への質問用法、つまり解答要求の表現のみを抽出し、独り言や自分自身への疑問の用法は含めていない。また、「だい？」と方言形以外の終助詞は丁寧体と普通体との併用が考えられるが、「か？」「かい？」は普通体との使用が一般的に男性指標形式とされることから、本稿では普通体での使用に限定して分析する。

まず、「の？」については、女性的指標形式とする先行研究もあるが、小林（2009）で男女変わらぬ使用が観察されているように、本調査においても男女ともに使用が見られた〔例：「また誰かにいじめられたの？」（オバア）、「おれ三日もいなかったの？」（叶）〕。しかし、従来から女性的指標形式と言われる「かしら」の使用については男女ともに皆無であった。

一方、「かい？」と「だい？」については、前述した談話1で男性が標準語を話したときに「だい？」の使用が1例あったのみで、それ以外には本調査では観察されなかった。「かい？」と「だい？」は先行研究では男性的指標形式と言われるが、本調査においては、男性発話者であっても、地域話者には使いづらさがあることがうかがえる。

「か？」については発話者の性差にかかわらず出現していることから、中立的指標形式として扱われていると言える〔例：「ヤチムン（陶芸）はどこで作るかわかったか？」（クレア）、「わかったか？」（ケン）〕。

また、方言形については、断定・主張の表現における方言形使用同様に、詳細な用法の分析が必要であるが、表8においては、多少の語形の偏りはあるものの、男女ともに観察される。つまり、解答要求表現では、従来から言われている女性的指標形式や男性的指標形式が特別な状況を除いて観察されず、男女の指標性が明確な形式は見当たらなかった。

3.9 行為要求の表現

行為要求の表現は「～なさい」（命令形の丁寧な用法）、「て形」（「～ないで」も含む）、「～てください」（て形の丁寧な用法で「～ないでください」も含む）、命令形（動詞の命令形と「見てみ」など「み」で終わる連用形命令を含む）、禁止形「な」、方言形の禁止形「ケー」〔「話サンケー」（話すな）、

「来ンケー」(来るな))、方言形の命令形〔一段動詞「起きれ」(起きろ)、不規則動詞「しれ」(しろ)〕について分析した。以下の表9に該当形式を使用した全登場人物による使用状況を示す。

表9 行為要求表現の出現度数

	性別	くなさい	て形	てください	禁止「な」	命令形	方言禁止	方言命令
叶 (379発話)	男	0	10	2	1	2	1	0
ケン (294発話)	男	0	0	0	4	10	0	0
ハブデービル (273発話)	男	0	2	0	3	35	0	1
クレア (140発話)	女	2	2	0	0	0	0	0
マブヤー (83発話)	男	0	0	0	1	6	1	0
オバア (80発話)	女	3	0	0	0	3	0	0
岩次郎 (57発話)	男	3	2	0	0	3	0	1
ニライ (37発話)	男	0	0	1	0	0	0	0
オニヒトデービル (32発話)	男	0	0	0	0	9	0	0
マングーチュ (17発話)	女	0	1	0	0	0	0	0
その他2名 (あいちゃん、ガイド)	女	0	1	0	0	2	1	0
その他13名 (団長、団員、デモ隊等)	男	1	2	7	6	15	0	1

表9を見ると、「～てください」と禁止形「な」の使用は男性発話者に限られている。ただし、「～てください」の使用は目上や初対面に対する発話、ニュース番組での視聴者への呼びかけに限られていることから〔例:「先輩、いいかげんにしてくださいよ」(青年)、「みなさん、一刻も早く避難してください」(キャスター)〕、女性登場人物の「使用無し」は登場人物数の少なさから単にそのような待遇場面がなかったことによると考えられる。禁止形「な」は、基本的には目上や立場が上のものから下のもの、あるいは敵に対

して使われているが、叶による兄、ニライへの使用（「ついてくんなよ」）や、青年仲間同士で使われたりしているので、男性的指標形式と言える。

「～なさい」は男女ともに使用が見られるが、男性は岩次郎と森の主という年配者による使用に限られる〔例：「少しはクレア見習いなさい」（岩次郎）〕。女性は年齢にかかわらず、クレアとオバアともに用いている〔例：「言いなさいよ、ちゃんと」（クレア）〕。

「命令形」の使用は主な登場人物を見ると、ニライを除き全ての男性発話者に使用が見られる。ただし、ニライもオニヒトデービルの人格のときには使用がある。一方、女性発話者による「命令形」使用は、オバアとツアーガイドの二人に限られる。ツアーガイドの「命令形」使用は前述した通り、「イチャリパチョーデー」のマブイストーンを奪われた影響によるもので〔例：「ずっとホテルにいとけ」〕、通常の使用とは言えない。オバアの使用は、「がんばれー」という定型的命令表現の1例を除くと、年下である叶に対してのみ使用している〔例：「ハーッサ（もう）、自分でとれ」〕。

「て形」は男女ともに使用が見られ〔例：「ねえ、肉とってきて」（マングーチュ）、「スーパーのあとにメーゴーサー（げんこつ）まで言ってから撃つて」（ハブデービル）〕、中立的指標形式として扱われていると言える。

方言形の禁止形と命令形については、前述したツアーガイドの特殊な状況による方言形禁止形の使用例〔「ヤッターいちゃいちゃサンケー」（おまえたちいちゃいちゃするなー）〕を除くと、女性発話者の使用は皆無である。

つまり、行為要求の表現については、男性発話者が待遇関係に応じて多様な表現を使い分けているのに対し、女性発話者は年齢や立場によって制限される形式があることから、「～なさい」は女性的指標形式、禁止形「な」、命令形、方言形禁止形・命令形は男性的指標形式と言える。

4. おわりに

以上、沖縄のテレビ番組の話しことばにおける主な性差指標形式の出現状況を分析した。結果として、発話者の性差による区別が明確な言語形式は次の通りであった。

女性的指標形式：

自称詞「わたし」、感動詞「あら」、終助詞「わよ」、断定・主張の「のよ」、
行為要求の「～なさい」

男性的指標形式：

自称詞「おれ」と「ぼく」、方言形自称代名詞、対称詞「おまえ」、
方言形対称代名詞、感動詞「おい」と「こら」、終助詞「ぞ」「ぜ」「な」、
断定・主張の「だな」「だぜ」「だよな」、推量・確認の「だろう」、
命令形、禁止形「な」、方言禁止形、方言命令形

主な登場人物によるこれらの指標形式の使用状況は以下の表10の通りである。

表10 主な登場人物の各指標形式の出現状況

(○は女性的指標形式、□は標準語の男性的指標形式、方は方言形の男性的指標形式、
各指標形式の中でも特殊な状況に限定される場合は各記号の塗りつぶし)

	性別	役割	自称詞	対称詞	感動詞	終助詞	断定主張	推量確認	行為要求
叶 (379発話)	男	ヒーロー	☐ ●			☐	☐	☐	☐ 方
ケン (294発話)	男	脇役	☐ ●	☐ 方	☐	☐	☐	☐	☐
ハブデービル (273発話)	男	悪役	方	☐ 方	☐	☐	☐	☐	☐ 方
クレア (140発話)	女	正義・若い女性	○			■	○		○
マブヤー (83発話)	男	ヒーロー	☐	☐	☐				☐ 方
オバア (80発話)	女	年配女性	●	☐	○	●	●		○ ☐
岩次郎 (57発話)	男	年配男性	方	☐	☐	☐	☐		○ ☐ 方
マンガーチュ (17発話)	女	悪役・若い女性	○			○			

表10を見ると、クレアとマンガーチュは紅一点という典型的な役割通り、男

性的指標形式の使用が見られない。また、オバアはクレアとマンガーチュと比較すると、女性的指標形式が際立つ話し方ではないが、年配であっても他の男性登場人物ほど男性的指標形式の使用が多くはないことが注目される。

方言形については各言語形式の出現に偏りがあるので、詳細な分析が必要とされるが、方言形は標準語形に比べると、中立的指標形式としてみなされているようである。ただし、自称詞、対称詞については、単なる地域のことばとしてあるのではなく、男性的指標形式と言っても差し支えない使用状況であることがわかった。しかも、その指標性は単なる男性的指標形式ではなく、使用は悪役か脇役に限られ、主役のヒーロー男性には用いられていない。本稿で見たように、主役の叶と悪役のハブデービルによる方言形出現状況を比較すると、金水（2003）が指摘する〈ヒーロー語〉＝〈標準語〉という図式は、程度の差はあれ、「琉神マブヤー」にも当てはまると言えよう。

つまり、本調査では佐竹（2003）による標準語のテレビアニメ番組ほどは女性が女性規範に従った話し方を強調されているわけではない。しかし、従来の女性的指標形式が日常では用いられない非現実的な用法として扱われている一方で、依然として、男性的指標形式は男性発話者の専売特許であることがわかった。さらに、方言形式は一般的に性差の区別がないと言われるが、方言形式も標準語同様に発話者の性差によって使用が限定される言語形式があることも観察された。

本稿で調査対象とした「琉神マブヤー」は、番組終了後も県内ショッピングモールやイベント会場で行ったキャラクターショー活動やグッズでも人氣が継続したことから、その後、「琉神マブヤー」の外伝として、「琉神マブヤー外伝 so! ウチナー」が琉球放送で2009年10月17日から2010年1月16日まで放送され、さらに、2010年10月2日からは「琉神マブヤー2（ターチ）」も毎週土曜日午前10時半から放送されている。これらの番組では、本稿で考察した第1弾と変わらぬ登場人物が引き続き登場している一方で、女性の登場人物が増え、役柄も主役級の役柄やマンガーチュとならぶ女の悪役などバラエティーに富んでいる。今後、これらの続編シリーズについても、本稿で詳細な分析が及ばなかった方言形の文末表現の考察を加え、地域社会への標準

語ならびに性差規範の拡散について考察していきたい。

注

- (1) 2009年10月4日の沖縄タイムス記事より引用。
- (2) 2009年9月30日の日経トレンディネット記事より引用。
- (3) 『琉神マブヤー』公式ウェブサイト <http://www.mabuyer.com/>
- (4) ウィキペディアフリー百科事典による「琉神マブヤー」より引用。
- (5) 登場人物の紹介はウィキペディアフリー百科事典による「琉神マブヤー」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%90%89%E7%A5%9E%E3%83%9E%E3%83%96%E3%83%A4%E3%83%BC>)とマブヤープロジェクト(2009)を参照した。
- (6) 大城・尚(2007)では沖縄の中南部を中心とした地域の、21世紀初頭の若ものが用いる日常語を沖縄地域共通語と名付けており、高江洲(1997)では方言の干渉を受けた標準語をウチナーヤマトグチと呼んでいる。さらに、亀井・河野・千野(1997)によると、戦後の都市化した沖縄本島中南部地域の話しことばを「ウチナーグチ」と呼んでいるが、本稿ではこれら沖縄本島中南部地域を中心とした話しことばで用いられる語形や表現を方言形とする。
- (7) 性別不詳人物はキジムナーである。キジムナーは沖縄周辺で伝承されてきた伝説上の妖怪で、樹木の精霊であると言われている。全身が真っ赤な子どもの姿をしている。
- (8) 「うち」や「うちら」は全国共通語でも用いられるが、大城・尚(2007)によると、「うち」という自称詞は「わたし」を意味する沖縄地域共通語であるとされる。
- (9) 宇佐美(2007)に従い、疑問文と語尾が上がる文末には「？」記号を用いている。
- (10) 「ワン」と「ワー」はどちらも琉球方言で「わたし」を意味するが、後続する助詞によって形が変わる(内間・野原 2006)。例: ワンネー(わたしは)、ワーガ(わたしが)、ワンニン(わたしも)
- (11) 高橋(2009)では、一般的に女性に用いられると言われる「あたし」の使用は単なる女性的指標形式ではなく、都会の地域方言としての指標性が強いことを指摘している。ゆえに、地域語社会で暮らす女性は、男性発話者のみでなく、首都圏で生活する女性と比べても自称詞の選択が難しいと言える。
- (12) 「あんた」も前述した「うち」同様に、全国共通語でも用いられるが、大城・尚(2007)

によると、「あんた」は「あんた、おまえ」を意味する沖縄地域共通語とされる。

- (13) 本稿で挙げた方言形の感動詞以外に「アキサミヨ」(わあ、大変!)、「アゲ」(やだ!)、「ハッシー」(もう!)、「ハーヤ」(ほんとに?)、「アイヤ」(しまった!)、「アギジェ」(いやだ!)、「ヤッケー」(大変!)、「ハッサミヨ」(おお!)についても出現状況を調べたが皆無であった。

参考文献

- 内間直仁・野原三義編著 (2006)『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』研究社
- 宇佐美まゆみ (2007)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15～18年度 科学研究費補助金 基盤研究B (2) 研究成果報告書 研究代表者 宇佐美まゆみ 課題番号 15320064 pp. 17-36
- 大城朋子・尚真貴子編 (2007)『日本語バイリンガルへのパスポートー沖縄で日本語教師をめざすあなたへー』沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1997)『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』三省堂
- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 小林美恵子 (2009)「授業談話データベースによる実態調査ー文末形式の「中性化」の様相ー」『ことば』30号 pp. 64-81 現代日本語研究会
- 斎藤美奈子 (1998)『紅一点論』ビレッジセンター出版局
- 佐竹久仁子 (2003)「テレビアニメの流布する『女ことば/男ことば』規範」『ことば』24号 pp. 43-59 現代日本語研究会
- 鈴木睦 (1993)「女性語の本質ー丁寧さ、発話行為の視点からー」『日本語学5月臨時増刊号』Vol. 12 No. 6 pp. 148-155 明治書院
- 高江洲頼子 (1994)「ウチナーヤマトウグチーその音声、文法、語彙について」『沖縄言語研究センター研究報告3 那覇の方言 那覇市方言記録保存調査報告書Ⅰ』pp. 245-289 沖縄言語研究センター
- 高橋美奈子 (2009)「地域語からみた自称詞における性差再考」『ことば』30号 pp. 82-95

現代日本語研究会

日高水穂(2009)「秋田における方言の活用と再活性化－フォークロリズムの視点から」『月刊言語』Vol. 38 No. 7 pp. 24-31 大修館書店

益田隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

マブヤープロジェクト(2009)『琉神マブヤー』DVD

マブヤープロジェクト監修(2009)『琉神マブヤー マブイストーンがデージなってる!』
ボーダーインク

(たかはし みなこ・琉球大学)